

# 松下創業者は常に “青春のよう”な夢をも もっていた

松下電器産業第四代社長の谷井特別顧問と、論語研究の第一人者で、松下翁とも深い親交があった伊與田先生に、日本人の企業倫理と自信を回復させるべく、「人を活かす」ことを第一義とした松下翁の経営哲学と人間学を、縦横無尽に語っていただいた。

**いいものをつくるために  
頑張っているが、品質管理の前に  
“人質管理”が大事だ**

伊與田―私は実業人ではありませんので、戦前には松下幸之助さんについて、電器事業で成功された立派な経営者だという印象はもっていましたが、それ以上のことは知りませんでした。終戦になって、昭和二十一年の初め、私は純研究を目的として「太平思想研究所」を創立したのですが、その年の十一月に、松下翁は「PHP研究所」を起こされ、翌年の四月に月刊誌『PHP』を発行されたのです。

PHPとは、「繁栄はんえいによって平和と幸福をきたす」という意味

で、繁栄を手離して謳歌おうかしているようですが、翁の心中では、「義による繁栄」を奥の院にしている、と受け取っていました。

太平思想研究所も同じ年に、素寒貧すかんびんでしたが、機関誌『有源げん』を発行しました。当時は印刷事情が悪いものですから、雑誌の発行は非常に目立ち、お互いに月刊誌を交換しようということになったのです。そういう経緯があつて、昭和三十一年、安岡正篤先生を中心とする東京の「全国師友協会」に呼応こおうして、大阪に「関西師友協会」を発足はつそくしたとき、いち早く役員として参加してくださいました。

次いで、昭和三十三、四年ごろでしたか、関電ビルの大講堂で、「人間学講演会」の主講師として快く来講らいこうしてください、時世じせいを凝視ぎょうししながら、卓越たくえつした人間観を語られた。その内容